

平成 21年 5月22日現在

研究種目：若手研究（スタートアップ）

研究期間：2007～2008

課題番号：19820010

研究課題名（和文） 1920年代日独プロレタリア革命童話の比較および受容研究

研究課題名（英文） A Comparative and Receptive Study of German and Japanese Proletarian-Revolutionary Fairy Tales in the 1920s

研究代表者

佐藤 文彦 (SATO FUMIHIKO)

金沢大学・外国語教育研究センター・准教授

研究者番号：30452098

研究成果の概要：本研究は 1920 年代の両大戦間期にドイツで流行し、同時代の日本でも受容されたプロレタリア革命童話を、作家や挿絵画家、出版者の活動を鑑み、後期表現主義の潮流と相まった国際的な芸術文化運動として位置付けた。その上で、国民童話を素材にして書かれた日独のプロレタリア革命童話を、狭義の左翼文学ではなく、国民文学史の書き換えを試みた 20 世紀都市モダニズム文学の一種として理解し、プロレタリア革命童話は今日、パロディ文学として読み直せることを指摘した。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	710,000	0	710,000
2008年度	580,000	174,000	754,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,290,000	174,000	1,464,000

研究分野：近現代ドイツ・オーストリア文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学（英文学を除く）

キーワード：ドイツ文学，比較文学，児童文学，プロレタリア革命文学，パロディ文学

1. 研究開始当初の背景

今日、ドイツ本国において 1933 年から 1945 年にかけての亡命ドイツ文学の研究は継続的に進められている一方、多くの亡命作家たちがドイツを離れる前、つまり 1920 年代に取り組んだ社会主義文学、またはその一ジャンルとしてのプロレタリア革命童話に対する関心は、極めて低いと言わざるを得な

いのが実情である。

そしてこの事情はわが国のドイツ文学研究の世界においても同様であり、具体的には当時のドイツの代表的なプロレタリア革命童話作家ヘルムニア・ツア・ミュレンが同時代の日本（や中国）で積極的に翻訳紹介された事実を知る者はほとんどいない。

彼女の紹介者である巖谷小波や村山知義

は 20 世紀初頭のドイツ、もっと言うとベルリン留学経験のある知識人であり、彼らとツア・ミューレンの接点を探ることは、日独文化交流史の上でもきわめて重要なテーマであると考えられる。さらにこういった人的交流だけでなく、ツア・ミューレンの翻訳や翻案、彼女の作品の影響下に書かれた日本のプロレタリア革命童話の作品分析は、ドイツのプロレタリア革命童話の国際的な受容史のみならず、わが国の児童文学研究の空白を埋める上でも意義深いものである。にもかかわらず、本研究の開始当初は、ほぼ手つかずの状態であった。

そこで本研究課題申請時に応募者は、日本におけるツア・ミューレン、および彼女を取り巻く両大戦間期ドイツの芸術文化状況の受容史を解明すれば、童話という文学ジャンルが有する土着性や郷土性は相対化され、このジャンルが秘める国際性や都市性を浮かび上がらせることができるのではないかと考えた。その結果、メルヘン研究全般にも新たな視座を提供できるのではないかと想起したのが本研究の着想に至った動機である。

2. 研究の目的

ドイツ文学研究の世界において今日、社会主義文学が顧みられることはほとんどない。また、児童文学研究の世界においても、社会主義文学の一ジャンルであるプロレタリア革命童話の研究はやはり立ち遅れていると言わざるを得ない。これらふたつの研究分野における空白は、必然的に日本におけるドイツのプロレタリア児童文学の受容および両者の比較研究の空白を生み出している。

本研究課題申請時に応募者が想定していた目的は、上記三分野の研究（ドイツ文学研究・児童文学研究・日独比較文学研究）を横

断的に行うことで、これらすべての研究史上の空白を埋めることであった。その際、両大戦間期のプロレタリア革命童話を、たんにドイツ語圏だけに流行した文学現象として捉えるのではなく、同時代に世界的に流行した一大文学（芸術）潮流として位置付け直すことで、郷土性や土着性ばかりが強調されがちなメルヘン像に 20 世紀都市文学としての新たな一面を付与することもまた目指した。

社会主義文学およびメルヘンについてこういった新しい理解に立つと、これらの文学ジャンルの融合形であるプロレタリア革命童話は、必ずしも左翼文学のひとつでは片づけられなくなる。とりわけ応募者は、伝統的な国民童話を書き換えた（パロディした）作品の解釈を通じ、プロレタリア革命童話を過去の文学史の伝統や同時代の外国文学に対して意識的な、一種のモダニズム文学として読み直すこともまた、目指していた。

3. 研究の方法

文献学的な研究である性格からして、本研究の実施に当たってはまず、資料の体系的および集中的な収集から行われた。ツア・ミューレンの初期文学作品（プロレタリア革命童話）はすでに収集済みであったので、ドイツ語文献に関しては、とりわけ二次文献の収集に集中した。具体的には、彼女の作品に対する書評、彼女と交流のあった作家や挿絵画家、あるいは出版者との書簡集、およびプロレタリア革命童話を含めた当時の芸術文化運動についての研究書や研究論文である。これらはおもに国外の研究機関で収集・調査された。研究開始当初ほとんど未収集であった日本語文献は、ツア・ミューレンの翻訳・翻案に始まり、その影響下に書かれた作品を収めた新聞・雑誌・単行本、さらに当時の研究書も

数多く集めることができた。

日本語・ドイツ語を問わず収集・整理された一次文献は当然、精読および分析（テキスト内在解釈）の対象となった。しかし本研究では、初年度はとくにドイツ語二次文献の精読に時間が割かれた。この作業を通じて、研究代表者は両大戦間期ドイツ（ベルリン・ワイマル）の政治経済の状況と社会動向を整理し、さらに当時の芸術文化運動（具体的には後期表現主義やダダイズム）が有した国際性を明らかにすることを試みた。その際、ツア・ミューレンと関係者との書簡集や、彼女が童話の創作と並行して行っていた翻訳活動の調査をもとに、社会学的考察も行った。

以上のような基礎研究に基づき、次年度はまず、わが国におけるツア・ミューレンの受容調査に取り組んだ。その際、ツア・ミューレンを紹介した人物たちのベルリン留学経験にも注目し、彼らのドイツでの動向については、やはり社会学的なアプローチが有効であった。それと同時に、彼女の紹介記事や翻訳、翻案、そして日本のプロレタリア革命童話（創作）を精読し、ドイツのそれとの比較研究を行った。

最終段階において本研究は、日独それぞれの国民童話を素材に書かれたプロレタリア革命童話を扱ったため、両国のプロレタリア革命童話のみならず、ドイツの先行童話とプロレタリア革命童話、および日本の先行童話とプロレタリア革命童話をも比較の対象とした。その際、文体およびテーマ分析の上でパロディ文学の研究手法が有効であると認めた研究代表者は、それを積極的に採用した。

4. 研究成果

本研究によって得られた最大の成果は、ドイツ文学・日本児童文学・日独比較文学の世

界において長らく闇に葬り去られていた「プロレタリア革命童話」というジャンルを発掘し、これら三つの研究史上の空白を埋めたことである。研究代表者はこの文学ジャンルを社会主義文学の一種として片づける従来の見解にとらわれることなく、1920年代に国際的に流行した一大芸術文化潮流、すなわち後期表現主義との関連において位置付けられることを指摘した。その結果、ヘルムニア・ツア・ミューレンに代表されるドイツのプロレタリア革命童話のみならず、わが国で書かれたプロレタリア革命童話もまた、国際的な文芸潮流の一現象として理解することが可能となった。具体的には、日独それぞれの国民童話（「桃太郎」やグリム童話など）を素材に書かれたプロレタリア革命童話のパロディ的要素に着目し、これらの作品は国民文学史の伝統を継承しつつも、その刷新を試みた20世紀都市モダニズム文学の一種である、との見解を発表した。

以上の成果は、日本独文学会2008年秋季研究発表会の場で披露され、その後の（旧東ドイツでの）社会主義文学の代表的な担い手であったブレヒトの研究者から活発な質疑を求められ、多大な反響を得ることができた。

また、アジアゲルマニスト会議2008金沢大会では、ツア・ミューレンの作品が同時代の日本の児童文学および社会主義文学の世界で積極的に翻訳紹介され、彼女の影響下に書かれた（と思われる）わが国のプロレタリア革命童話が多数存在する調査結果を、ドイツ語で発表した。この会議にはドイツ語圏だけでなく、中国や韓国など、アジア各国からの研究者も参加していたため、日本を經由して行われたアジアにおけるツア・ミューレンの受容例（具体的には、魯迅がツア・ミューレンの中国語訳を日本語からの重訳で発表していた事実）の報告から、アジアにおける

ツア・ミュールン受容研究の可能性についても言及することができた。

これらの研究成果を踏まえた今後の展望として、本研究課題が集中的に取り組んだ「ヘルムニア・ツア・ミュールンと日本」というテーマをより発展させた方向での研究が考えられる。換言すると、ヘルムニア・ツア・ミュールン以外のドイツのプロレタリア革命童話作家が日本ではどう受容されたのか、あるいはそもそもドイツ語圏においても、ヘルムニア・ツア・ミュールン以外のプロレタリア革命童話作家の研究はほとんど手つかずの状態であるため、その存在を知らしめることから期待される。こういった埋もれた作家の発掘と、彼（女）らの日本およびアジアでの受容状況、さらに彼（女）らが日本およびアジア（もっと広くオリエントと捉えることも可能であろう）を素材に書いた作品の分析から、今後はさらにドイツのプロレタリア革命童話の国際性を、日本やアジアから照射した形で解明したいと考えている。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 1 件）

- ① 佐藤文彦, 搾取者としての「漁師とその妻」と「桃太郎」— 日独プロレタリア革命童話における文学伝統の再利用について—, 言語文化論叢, 13 卷, 91-106, 2009, 査読無

〔学会発表〕（計 2 件）

- ① 佐藤文彦, ヘルムニア・ツア・ミュールンのプロレタリア革命童話, 日本独文学会 2008 秋季研究発表会, 2008. 10. 13, 岡山
- ② 佐藤文彦, Die Rezeption des deutschen proletarisch-revolutionären Märchens in Japan, Asiatische Germanistentagung

2008 in Kanazawa, 2008. 8. 28, 金沢

6. 研究組織

(1) 研究代表者

佐藤 文彦 (SATO FUMIHIKO)

金沢大学・外国語教育研究センター・准教授

研究者番号: 30452098

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者